

オリンピック・パラリンピック教育推進による、子どもの運動習慣の定着・改善に向けて

学校名 山陽小野田市立有帆小学校（山口県）全学年
全校児童数 143名（男子76名 女子67名）
（本実践に係る問合せ先）
電話番号 0836（83）2822
学校メールアドレス araho-es@edu.cty-so.jp

1 実践（研究）のねらい

- （1） 2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機としたオリンピック・パラリンピック教育を推進し、運動・スポーツへの関心を高めることで、子どもの運動習慣の定着・改善を図る。
- （2） 著名なスポーツ選手によるデモンストレーションや講演から、自らの生き方について考えるとともに、運動や体力向上についての意欲を高める。
- （3） パラスポーツの体験を通して、共生社会を構築していくための課題の理解と、その解決に向けた実践的な態度を育てる。

○課題を解決するために実践した具体的な取組について

1 著名なスポーツ選手を活用した運動教室

- （1） 山口県出身の岩政大樹氏（サッカーワールドカップ南アフリカ大会出場）を講師に招聘
児童にとって、より身近で憧れを抱き、自らの生き方につなげて考えることができるように、山口県出身のスポーツ選手を招聘した。
- （2） 一緒に活動し動きを体感すること
トップアスリートの動きを一緒に活動することで、体感できる場を設定した。児童にとって思い出になるだけでなく、スポーツへの興味を高めることにつながると考えた。

2 レクリエーション協会と連携した運動遊び教室

- （1） 山口県レクリエーション協会の方を講師に、運動遊び教室を開催
県レクリエーション協会の方を講師にすることで、教員の知らない新しい運動遊びの情報を得ることができたり、児童への声掛けや遊び方を学んだりすることができ、運動教室後も担任を中心として手軽に実施できるため依頼をした。
- （2） ボッチャ体験
障害の有無にかかわらず、すべての人が一緒に、そして競い合えるスポーツということでボッチャを選定し実施。実施後も体験できるように、コートを体育館に常設し、日常的に体験できる環境を整備。

○成果の意義

- 1 掲示を工夫し、オリパラに関する情報を提供することで、児童にとってオリパラが身近なものとなり、興味・関心を抱く児童が増えた。
- 2 県内出身のトップアスリートとの触れ合いを通じて、動きに驚きや憧れを抱くだけでなく、生き方や考え方に感銘を受けた。児童の感想にも「考えることを大切に、何事も継続していきたい」とあった。キャリア教育にもつながる効果が期待できる。
- 3 ボッチャの体験を通して、すべての人が一緒に、そして競い合えるスポーツの楽しさに触れることができ、共生社会を構築していく上でのスポーツの役割や大切さに気付くことができた。

○今後の課題

- 1 オリンピック・パラリンピックを実際に見に行ったり、手伝いやボランティアをしたりすることは、遠方の為、現実味を帯びていない。体験したことをどう生かし、実践につなげていくか。
- 2 「する・みる・支える・知る」をバランスよく実施していくこと。
- 3 運動習慣定着に向けて、地域と連携した取組と体力向上につながる具体的な取組の工夫と継続的な実施。

○ 研究内容

【岩政大樹氏による講演】

実体験をふまえた、わかりやすく、情熱的な話だった。



【岩政大樹氏による運動教室】

トップアスリートとの触れ合いにより興味・関心が高まった。



【ボッチャ体験】

県レクリエーション協会の方を講師にボッチャ体験を実施。



【県レクリエーション協会による運動遊び教室】

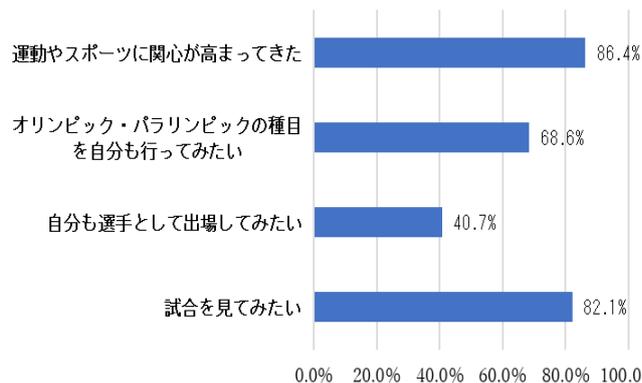
授業や休み時間に活用できる運動遊びを実施。



【児童アンケート】

本実践終了後、全児童にアンケートを実施した。

オリンピック・パラリンピックに関するアンケート



運動やスポーツに関心が高まった児童は、86%を超えた。「ボッチャ以外のパラスポーツを知りたい」「サッカーや陸上だけでなくボッチャなど、パラリンピックも見てみたい。」という、感想を述べた児童がいた。

しかし、将来自分も選手として出場してみたい項目は、40%程度と低かった。運動の二極化が本校でも見られ、運動を苦手と感じている児童も多い。運動習慣定着に向けて、継続的な取組の必要性を感じた。

【今後の取組について】

本実践終了後の学校の取組の方向性、内容について

「する・みる・支える・知る」をバランスよく実施していく観点から、来年度はあらかじめ年間指導計画に位置付け、オリパラ教育を計画的に実施していきたい。

具体的には、総合的な学習の時間とも関連させ、オリンピック・パラリンピックの内容・歴史を深めたり、人権教育参観日と関連させたり、図画工作科等様々な教科との関連を図ったりし、オリンピック・パラリンピック教育を進めていきたい。